

## 『論語』の一節をもとにエッセイを書く学習指導

著者	秋田 哲郎
雑誌名	人文学教育研究
号	40
ページ	27-40
発行年	2013-08-13
その他のタイトル	A Report of the class "Teaching Analects by writing an essay"
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00123503">http://hdl.handle.net/2241/00123503</a>

# 『論語』の一節をもとにエッセイを書く学習指導

秋 田 哲 郎

## 1. はじめに

『論語』は、古くから読み継がれてきた作品であり、我が国の文化や人々の価値観に大きな影響を与えた書物である。書店には新たに出版された『論語』の解説書が並べられ、自宅に『論語』に関する本があると言う中学生も多いことから、現代においても人々に影響を与え続けている書物であることがうかがえる。中学校においては、学ぶ学年や掲載されている文章などに違いはあるものの、どの国語の教科書にも『論語』の一節が掲載されており、中学校で必ず目にする漢文の一つとなっている。

教材として扱われる機会が多い作品だけに、これまで学習指導法の研究や実践の提案も様々な形で行われているが、教科書に付された学習課題（学習の手引き）に着目すると、学習指導のありかたが新たな方向に変わりつつあることがわかる。後ほど詳しく述べるが、端的に言えば、それは学習者がそれぞれどのような文脈の中で『論語』の一節を読むのかに力点を置いた学習指導であり、学習者相互の読みの交流に力点を置いた学習指導である。

本稿で報告する『論語』の一節を用いた授業実践も、このような学習指導のありかたの新たな方向に位置づくものである。授業実践の報告ではあるが、指導者がどのような指導を行ったかということよりは、学習者がどのような文脈の中で『論語』の一節を読んだのかに力点を置いた報告としたい。

## 2. 中学校における『論語』の学習指導について

### 2-1. 教科書の『論語』教材

現行の平成24年度版国語教科書には、次の表1に示した『論語』の一節が掲載されている<sup>4)</sup>。

表1 平成24年版中学校国語教科書に掲載されている『論語』

出版社	学年	作 品
東京書籍	3年	子曰、「君子和而不同，小人同而不和。」(子路)
		子曰、「過而不改，是謂過矣。」(衛靈公)
		子貢問曰、「有一言而可以終身行之者乎。」子曰、「其恕乎。己所不欲，勿施於人也。」(衛靈公)
学校図書	2年	子曰、「吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲，不踰矩。」(為政)
		子曰、「学而不思則罔。思而不学則殆。」(為政)
		子曰、「由，誨女知之乎。知之為知之，不知為不知。是知也。」(為政)

		子貢問曰、「有一言而可以終身行之者乎。」子曰、「其恕乎。己所不欲，勿施於人也。」(衛靈公)
三省堂	3年	子曰、「学而時習之，不亦説乎。有朋自遠方來，不亦樂乎。人不知而不慍，不亦君子乎。」(学而) ※『書經』の文章などと併せて「中国の古典の言葉」として掲載。
教育出版	3年	学而時習之，不亦説乎。有朋自遠方來，不亦樂乎。人不知而不慍，不亦君子乎。(学而) 徳不孤。必有隣。(里仁) 己所不欲，勿施於人。(顔淵)
光村図書	3年	子曰、「学而時習之，不亦説乎。有朋自遠方來，不亦樂乎。人不知而不慍，不亦君子乎。」(学而) 子曰、「温故而知新，可以為師矣。」(為政) 子曰、「学而不思則罔。思而不学則殆。」(為政) 子曰、「剛毅木訥，近仁。」(子路)

表1からは、一つの教科書だけにしか掲載されていない文章もあるものの、複数の教科書に掲載されている文章もかなり見られることがわかる。一つ前の平成18年度版教科書をはじめとする過去の教科書を見ても、中学校の国語教科書に掲載されてきた『論語』の文章の種類はそれほど多いというわけではなく、ほぼ表1に示した文章が掲載されてきたと言ってよい。

中学校の国語教科書には、いくつかの『論語』の一節がいわば「定番教材」として掲載されてきたわけであるが、教科書が示す学習指導のありかたについては、現行の教科書で新たな方向性が示されていると考える。次の表2に、現行の各教科書に付された学習課題（学習の手引き）を平成18年度版教科書のものと一緒に示すこととする（課題の趣旨が変わらない範囲で一部の表現を省略している。強調字体と下線は引用者による）。

表2 『論語』を扱った教材についての学習課題（学習の手引き）

出版社	学習課題（学習の手引き）
東京書籍	<p>現行</p> <p>①訓読文を見て音読ができるように、繰り返し練習しよう。</p> <p>②現代語訳と対照させながら、それぞれの言葉に表れている孔子の考えを捉えよう。</p> <p>・孔子の言葉の中から、特に印象に残った所を引用し、それについての自分の考えを文章にまとめてみよう。(孔子の言葉に当てはまるような体験や事例があれば、文章中で触れてみよう。)</p>
	<p>18年</p> <p>④漢文特有の言い回しに注意して朗読しよう。</p> <p>・書き下し文を参考にしながら、漢文を読んでみよう。</p> <p>⑥古人のものの見方や考え方をとらえよう。</p> <p>・孔子の言葉に当てはまるような出来事を思い浮かべてみよう。</p>
学校図書	<p>現行</p> <p>①<u>次のような点を出し合おう</u></p> <p>①今の日本でも使われている熟語</p> <p>②今の日本にも通用する考え方</p> <p>③<u>自分の生活に照らして考えさせられたこと</u></p> <p>②それぞれの孔子の言葉は、どんな人物に対してどのような場面で言われた言葉か、想像しよう。</p> <p>(音読) 繰り返し音読して、漢文訓読調に親しもう。</p>

学校図書		(深める) 漢和辞典で調べよう。
	18年	※現行の①・②・(音読)に同じ
三省堂	現行	・漢文独特のリズムや口調を味わいながら朗読しよう。 ・ <u>中国の古典の言葉の一節を引用し、三百字程度の文章を書こう。</u> ・ <u>中国の古典の言葉から読みとった内容について交流しよう。</u>
	18年	※「資料編」収録のため、なし。
教育出版	現行	1 漢文特有の言いまわしに注意して、『論語』の文章を、その意味を思い浮かべながら、朗読しよう。 ①『論語』の文章から一つを選び、身近な事柄にそれをあてはめて、自分の考えを文章にまとめよう。 ②『論語』の文章に示された孔子の考え方について、感想を発表しよう。 ③『論語』には、ほかにどのような有名な文章があるのか、調べよう。
	18年	・「孔子の言葉」の中から、気に入ったものを選んで、暗唱してみよう。 ・「平家物語」と「論語」を声に出して読み、その共通点や相違点を探ってみよう。 ・「平家物語」と「孔子の言葉」とおして読み、気づいたことを発表し合ってみよう。
光村図書	現行	・「平家物語」や「孔子の言葉」が、現代の我々へ投げかけている課題を読み取ろう。新たな旅立ちを迎える中学三年生に向けて、190ページからさまざまな文章を取り上げている。それぞれの文章に込められたメッセージを受け止め、これからの自分について考えよう。
	18年	①次のような、漢文特有の言い回しに注意して、書き下し文を繰り返し音読しよう。 ②『論語』は、短い言葉の中に、人間の生き方についての鋭い感覚や深い思索が表れている。それぞれの言葉がどのような考え方を示しているかを読み取ろう。 ③四つの言葉の中で気に入ったものを選び、暗唱してみよう。

現行教科書の学習課題（学習の手引き）の記述で目立つのは、『論語』の一節を自らの生活・身近な事柄・体験などに当てはめ、その一節を引用しながら自らの考えを書くという課題である（表2の下線部参照）。18年度版ですでにこのような課題が示されている教科書もあるが、多くの18年度版教科書では、音読・朗読することを通じて漢文の言い回しに親しむことや、『論語』の一節に示されたものの見方・考え方をとらえてそれを現代の社会や言語に当てはめて考えさせる課題が多く、学習者がそれぞれ自らの生活や体験の文脈の中で『論語』の一節をとらえるような課題は少ない。学習課題（学習の手引き）の力点は、テキスト自体の理解から、学習者がそれぞれどのような文脈の中で『論語』の一節を読むのかに移りつつあると考える。

現行教科書でこのような課題が設定されるようになった背景には、平成20年度版中学校学習指導要領の第3学年〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の指導事項として、「(1) ア(イ) 古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと」が設定され、「生徒が自分の考えを述べる文脈の中に古典の世界を取り入れるようにすることが重要である」（文部科学省、2008, p.76）とされたことが挙げられる。さらには、PISA 調査を受けて作成された「読解力向上プログラム」に「テキストを読んで理解することによって得られた知識等について、実生活や行動と関連付けて書く力を高めるとともに、他方で書いたものをさらに深めることを通じて読む力を高めることが期待される」（文部科学省、2005, p. 76）とあるように、読むことによ

て得た知識を活用することが重視されるようになったことも課題設定の背景にあるであろう。現行教科書の学習課題（学習の手引き）の変化は、古典を用いた読みの教育のありかたの大きな変化の中に位置づけられていくと考える。

また、『論語』の一節を読んで考えたことや感じたことを発表しあうという、学習者相互の読みの交流をうながす課題が設定されている教科書が多いことも、現行教科書の学習課題（学習の手引き）で目立つ点である（表2の下波線部参照）。こちらは18年度版教科書からの大きな変化とまでは言えないが、18年度版ですでにこのような課題が示されている教科書はそれを踏襲し、新たに設定した教科書もある。このような課題が設定されるようになった背景には、先ほどと同様に平成20年度版中学校学習指導要領の影響があり、第2学年〔C読むこと〕の言語活動例として「詩歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について感想を交流すること」が挙げられるなど、「交流」の重要性が強調されているためであると考えられる<sup>9</sup>。

## 2-2. 安東俊六の論考について

中学校における漢文教育について論じた最近のまとまった研究の一つとして、安東俊六の一連の論考<sup>10</sup>を挙げるができる。中国文学の専門家である安東は、この一連の論考の中で、繰り返し「中学校で漢文を学ぶ意義」についての持論を次のように述べている。

今日の中学生在が漢文から学ぶべきものは、彼らが日々生きている社会の基本的なものの考え方であって、それが既に中国の古典の中に記されているから中学生の段階で学ぶべきなのであり、中学生が漢文の教材から学ぶべきものは、それ以外の何者でもありえない。（安東、2004, p. 241）

また、『論語』について次のように述べている。

『論語』が今日の中学生においても身近にあるということは、よく目にする名前に「克己」という名前があったり、よく目にする出版社の名前に「三省堂」という名前があったりして、その出典が『論語』であることは知らないまでも、極めて日常的な場で『論語』に接しているのである。（中略）中学生は一年生で学ぶ(1) 故事成語において、すでに『論語』の名文句のいくつかを学び、「我が国」の先人たちがいかに『論語』から多くのものを学んだか、そしてそれが今日の日常生活の中にいまなおいかに生き続けているということ学んだはずである。この一年生での学習の成果を踏まえて、二年生ないし三年生で(2) 思想の教材としてさらに『論語』の数章を学べば、『論語』は中学生により身近なものとなって、中学生が日々生きている今日の日本の社会の基本的なものの考え方がそこに記されていることを、はっきり認識するであろう。（安東、2004, p. 241）

先に述べたように、現行の教科書では、『論語』の一節を自らの生活・身近な事柄・体験などに当てはめ、その一節を引用しながら自らの考えを書く課題が新たに設定されるようになったが、当然ながら、なぜ『論語』の一節でなければならないのか、中学生はこのような課題に応えることができるのかといった点については検討が為されるべきであろう。しかし、安東の考えに従え

ば、社会の基本的なものの考え方が記され、中学生が「極めて日常的な場」で接している『論語』であれば、容易に自らの生活・身近な事柄・体験などに当てはめ、両者を自らの考えにしたがって結びつけることができるはずだという見通しを持つことはできる。もちろんこの検討は、中学生が実際に『論語』にどう向きあうか、どの文章についてどのような生活・身近な事柄・体験などを重ねるかを調査するところまで至ることが必要であろう。この調査・研究を「4. 学習者の書いたエッセイについての考察」で行っていききたい。

### 3. 授業実践の概要

#### (1) 実施時期と対象

(実施時期) 2011年12月

(対象) 筑波大学附属中学校3年1組～5組(男子101名, 女子102名, 計203名)

#### (2) 目標

- ・音読を通じて、漢文特有の言い回しに親しむ。
- ・『論語』の一節をもとにしたエッセイを書くことを通じて、『論語』にあらわれたものの見方や考え方についての考えを持ち、自らの経験や見聞・考えなどをとらえなおす。

#### (3) 授業展開

(第1時) ①学習の目標と計画を知る。

②「エッセイ」という文芸について確認する。<sup>(4)</sup>

③2年生の時に学習した『論語』について復習する。<sup>(5)</sup>

(第2時) ①指導者が選んだ『論語』の8つの文章について、繰り返し音読する。

②現代語訳や語釈を参考に、8つの文章のおおまかな内容をつかむ。

③8つの文章の中に当てはまりそうな自らの経験や見聞について考える。

(第3時) ①8つの文章から一つを選んでエッセイを書く。

②クラスの中でエッセイを読みあう。

#### (4) 教材

各社の教科書に掲載されている『論語』の中から、次の8つの文章を選んだ。訓読文だけではなく、書き下し文・現代語訳つきのものとした。

①子曰、「学而不思則罔。思而不学則殆。」(為政)

②子曰、「由、誨女知之乎。知之為知之，不知為不知。是知也。」(為政)

③子貢問曰、「有一言而可以終身行之者乎。」子曰、「其恕乎。己所不欲，勿施於人也。」(衛靈公)

④子曰、「君子和而不同，小人同而不和。」(子路)

⑤子曰、「過而不改，是謂過矣。」(衛靈公)

⑥子曰、「学而時習之，不亦説乎。有朋自遠方来，不亦乐乎。人不知而不慍，不亦君子乎。」(学而)

⑦子曰、「温故而知新，可以為師矣。」（為政）

⑧子曰、「剛毅木訥，近仁。」（子路）

(5) 付記

今回書いたエッセイについては、筑波大学の甲斐雄一郎の研究計画に基づき、韓国・台湾・中国の中学生との読みの交流を行う予定があることを生徒に伝えている。詳しくは、甲斐(2012)を参照。

#### 4. 学習者の書いたエッセイについての考察

今回の授業実践を行った時期は多くの生徒が高等学校の受験準備に当たっている時期であり、エッセイを提出しない者も少なくなかった。また、回収した国語係の生徒が一部を紛失してしまったということもあり、回収できたのは162名分であった。この162名分については、意欲的、かつ抵抗感無くこの課題に取り組んでいることが伝わる内容であり、2-2で示した見通しについては正しかったことがうかがえた。

論語の文章①～⑧の選択の状況は下記の表3（左）の通りである。また、エッセイの内容によって、自らの生活や経験をもとに記した「物語型」と、自らの生活や経験を交えずに書いている「評論型」に分け、さらにそれぞれを次のように二つに分けた。<sup>6)</sup>

表3

物語型	学 校	幼稚園（保育園）・小学校・中学校での生活や経験をもとに記しているもの。通学時や自宅にいる際の学校の友人とのやりとりなどもここに含めることとした。
	学校外	主に家庭での生活や経験をもとに記しているもの。家族や同じ学校に通っていない友人とのやりとりが主である。勉強に関わることでも、学校での学習に関わりのないもの（学習塾で習っていることなど）はここに含めることとした。
評論型	見聞あり	テレビやインターネット、家族や友人などから見聞きした世間一般の話や他者の経験談をもとに記しているもの。
	見聞なし	自らの生活や経験・他者から見聞きしたことの両者とも交えずに、『論語』の一節について反論したり、他の言葉と比較して自らの考えを述べているもの。

表3 エッセイの分類

番号	選択した論語		物 語 型		評 論 型	
	選択者	割合	学 校	学校外	見聞あり	見聞なし
①	10	6.2%	4	5	1	1
②	34	21.0%	20	5	5	4
③	25	15.4%	16	8	4	2
④	19	11.7%	15	1	4	1
⑤	50	30.9%	27	13	7	7
⑥	10	6.2%	3	4	1	2
⑦	8	4.9%	5	1	2	0
⑧	6	3.7%	5	0	1	0
計	162	100.0%	95	37	25	17

生徒のエッセイの中には、たとえば「自らの学校での経験」と「テレビのニュースからの見聞」の両方をもとに書いているものもあり、このような例については「物語型・学校」と「評論型・見聞あり」の双方に該当するとした。このようにして分けた結果は、表3（右）のようになった。表3，ならびにエッセイの内容からは、次のようなことが言えると考える。

- (1) 選択した論語の文章には偏りがあり、②③④⑤の四つで全体の8割近く（128編）を占めている。エッセイを書く上で選びやすいものと選びにくいものがあるようである。多くの生徒が選んだ②③④⑤とあまり選ばれなかった①⑥⑦⑧の違いについては見いだせなかった。⑥は三つの教科書が掲載しているが、これを選んだ生徒は少なかった。
- (2) 自らの生活や経験をもとに記した「物語型」に分類できるものが全体の8割を占める。なかでも、学校での経験をもとにエッセイを書いているものがやはり多い。学校での経験をもとに書いているものの中では、中学校での生活、なかでも3年生になってからの経験を書いている者が大半であるが、約2割の者（18編）は中学校入学以前の小学校や幼稚園での経験をもとに記している。
- (3) 物語型・学校にしぼってみていくと、論語の文章ごとに、似た経験を多くの者が挙げていることがわかる。選択者の多い②～⑤について、その主なものを次の表4に示す。なお、分類した作品の中の典型例と判断したものを《資料》に掲載することにする。

表4 多くの者が挙げた経験

番号	経験	
②	・定期考査などのテストを受けた経験、その前後の学習（9／20編） ・友人との会話で知っているふりをしてしまった経験（5／20編）	《資料a》
③	・友人とのトラブルやいじめを受けた経験（10／16編）	《資料b》
④	・クラスや委員会等の場で生徒同士で話し合った経験（13／15編）	《資料c》
⑤	・定期考査などのテストでよい結果を出せなかった経験（10／27編） ・友人とのケンカと仲直りした経験（7／27編）	《資料d》

- (4) 物語型・学校外では、家族とのやりとりをもとに書いている者が最も多く（10／37編）《資料e》、次いで学習塾や家庭学習の経験（8／37編）を挙げている者が多かった。⑥では、4名全員が転校していった（自分が転校して分かれた）友人との再会のことをもとに書いていた。
- (5) 評論型・見聞ありでは、東日本大震災に関連するニュース（原子力発電所・避難所・節電・学校疎開に関わるもの）を取りあげたもの《資料f》と、日本や中国の政治家に対する不満を述べたものがそれぞれ25編中5編ずつあった。また、⑤では、事件や事故を起こした人の更生や再犯について書いている者が7編中3編あった。
- (6) 評論型・見聞なしでは、『論語』に書かれたことを受け継いで自らの考えを追加したり、孔子の言葉の真意を自分なりに考えたり、反論したりしているものが大半であった（13／17編）《資料g》。また、他の言葉と比較しながら自分の考えを述べているものが3編あった。



## 5. まとめと今後の課題

中学生に、『論語』の一節をもとにしたエッセイを書かせてみると、当然ながら選ぶ文章も書いた内容も多様であるものの、ある傾向を見いだせることも事実であった。エッセイを書く上で選びやすい文章と選びにくい文章があったり、内容についても、学校での経験をもとに書いているものが多いなどという傾向があった。また、論語の文章ごとに、似た経験を多くの者が挙げている傾向も見られた。

今後の課題としては、次の3点があると考ええる。

- (1) エッセイの分類方法を変えることで新たな知見を得ることができないか、検討すること。
- (2) 今回の授業では扱えなかった『論語』の一節を新たに取りあげたり、他学年で授業を行うなどして、今回見られた傾向が同じように現れるかを検証していくこと。
- (3) 今回の結果を踏まえて、今回の学習指導を改善したり、新たに構想し直したりすること。

## 6. おわりに

今回報告する授業実践を構想するにあたり、筑波大学の甲斐雄一郎先生からご指導・ご助言をいただきました。ありがとうございました。また、本稿は、第11回筑波大学教育学会で発表したものに加筆・訂正したものです。ご質問・ご意見をいただいた方々に感謝申し上げます。

### 【注】

- (1) 表1ならびに表2で取りあげた各社の平成24年度版（現行）・平成18年度版国語教科書の著作者・検定済年・書名は以下の通り。なお、教科書は、文部科学省「中学校教科書目録」の掲載順に並べている。

出版社		著作者	検定済年	書名
東京書籍	現行	三角洋一，相澤秀夫ほか	平成23年	新しい国語3
	18年	三角洋一，相澤秀夫ほか	平成17年	新編 新しい国語3
学校図書	現行	野地潤家，安岡章太郎，新井満ほか	平成23年	中学校国語2
	18年	野地潤家，安岡章太郎ほか	平成17年	中学校国語2
三省堂	現行	中洲正堯ほか	平成23年	中学生の国語三年
	18年	金田一春彦，長谷川孝士ほか	平成17年	現代の国語3
教育出版	現行	加藤周一ほか	平成23年	伝え合う言葉 中学国語3
	18年	木下順二，加藤周一ほか	平成17年	伝え合う言葉 中学国語3
光村図書	現行	樺島忠夫，宮地裕，渡辺実ほか	平成23年	国語3
	18年	樺島忠夫，宮地裕，渡辺実ほか	平成17年	国語3

- (2) 古典教材と「交流」の関わりについては、甲斐雄一郎（2012）に詳しい。
- (3) 安東俊六（1999）から始まる「中学校における漢文教育の再検討」と題した一連の論考参照。
- (4) 「エッセイ」という文芸について、ほとんどの生徒は知識を持っていたが、再度次のような確認を行った。「エッセイ」は、日本では「随筆」と訳されることが多く、自らの経験・見

聞・感想などを自由な形で表現した文章であるとされているほか、ある物事についての自らの考えを示した小論であるという考え方もされている。自らの経験や見聞をもとに書くことが多いが、それらを交えずに、あるものごとに対する自らの考えを述べたものでもよい、とされている。

- (5) 本校では学校図書の教科書を用いており、生徒は『論語』について2年生で学んでいるので、『論語』という作品の概要やそのいくつかの文章についての解説は簡単に行うにとどめた。
- (6) 自らの生活や経験をもとに記しているものでは、自らが体験した出来事を物語のように時間の順序に沿って記している部分がエッセイの多くを占めているものが多かった。また、自らの生活や経験を交えずに書いているものでは、自らの考えを記している部分がエッセイの多くを占めているものが多かった。このようなことから、前者を「物語型」、後者を「評論型」と呼ぶこととした。なお、渡辺雅子(2004)を参考とした。

#### 【文献】

- 安東俊六(1999)「中学校における漢文教育の再検討」『岐阜大学国語国文学』第26号, pp. 1-11  
——(2004)「中学校における漢文教育の再検討(五編)」『岐阜大学教育学部研究報告—人文科学—』, 第52巻2号, pp. 239-248
- 古珮玲・李有珠ほか(2010)「漢字文化圏における漢文教材—現行の中学校国語教科書所収の『論語』教材を通して」『人文科教育研究』第37号, pp. 65-78
- 牛尾弘孝(2010)「中学校における『論語』の教材化をめぐる諸問題—安東俊六氏の論考と免許状更新講習を通して」『国語の研究』第35号, pp. 1-14, 大分大学国語国文学会
- 大橋賢一(2006)「実践研究報告 現代に生きる『論語』—中学校第二学年を対象とした国語教材としての『論語』について」『新しい漢字漢文教育』第42号, pp. 59-67
- 甲斐雄一郎(2012)「古典化への参加」筑波大学・北京師範大学国際シンポジウム「中日言語文化の共有と交流」発表資料
- 文部科学省(2005)読解力向上プログラム  
<http://www.mext.go.jp/a-menu/shotou/gakuryoku/siryo/05122201/014/005.htm>  
——(2008)『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- 渡辺雅子(2004)『納得の構造—日米初等教育に見る思考表現のスタイル—』東洋館出版社

【資料：生徒の書いたエッセイの例】

《資料 a》 選択した論語＝②（物語型・学校） 題＝知ること

わたしには知っていることがたくさんある。しかし、知らないこともたくさんある。むしろ、知らないことの方が知っていることよりはるかに多いに違いない。それを孔子は「自分の知っていることは知っているとし、自分の知らないことは知らないとする。これが本当に知ることだ。」と言っている。孔子は何が言いたかったのか。それが少しわかった気がしたのは、テスト勉強をしている時の自分を思い出したからだった。

テスト勉強ではまず、英語なら教科書を書きとり、数学なら問題集を解く。国語なら意味調べをしたり、プリントを見なおし、理科社会ならノートをまとめ直してみる。この時必ず間違いやわからない箇所が出てくる。多くの場合、訂正して繰り返し解き直したり友達や先生に質問したり自分で調べたりする。しかし、めんどろだったり、時間がなかつたり、あるいは理解したものとしてそれをしなかったときはどうなるか。テスト当日、その問題は解けず後悔することになる。たとえその問題が出題されなかったとしても、後の学習などに大きく関わってくると思う。

つまり、「知っていることは知っているとし、知らないことは素直に知らないと受けとめることが本当に知ることである」と孔子は言っている。さらに私は、「知ること」の先には「理解すること」があって、物事を知って、理解して初めて自分のものになるんだと自分なりに納得した。果たしてそれが正しい解釈であるかはわからないが、孔子は私に「知ること」を理解させてくれた。

《資料 b》 選択した論語＝③（物語型・学校） 題＝怒

よく、小学校の時などに、先生が、「自分がされて嫌なことは、他人にするな」と言っていた。ただその言葉を聞いただけで、それが思いやりというものだと思っていたが、それと同時に、逆に自分がされても平気なことは他人にしてもいいと思っていた。

しかし、小学校の時にいじめというまではいかないものの、クラスで一もんちゃくあり、その時に加害者側の人間が言った「自分はされても別に何とも思わないからやっていた」という言葉がとても印象的で今でも覚えている。この時僕は自分の考え方が間違っていることを知った。「自分がされて嫌なことは、他人にするな」という言葉の本当の意味は、他人の気持ちも考えて、結果その気持ちを自分に当てはめたらどう思うのかということだと分かった。

このように他人の気持ちを考えた上で「己の欲せざるところ、人に施すことなかれ」という行動が思いやりである「怒」につながっている。この「怒」というのはただの行動だけについて言及しているだけでなく、行動の理由にまで言及していると思う。またこの文の意図とはずれてしまうが、この「怒」はただ思いやるだけでなく行動の影響について、「思う」ということも言っていると思う。

このように日々生活している中で健全な人間関係を築く上で、この文はとても役立ち、こ

れを基本中の基本として実生活でこれからも役立てていきたい。

《資料c》選択した論語＝④（物語型・学校） 題＝反対派のおかげで生まれた調和

私達の学校では、秋に学芸発表会が行われる。簡単に言えば、日々の努力の成果を発表する場で、多くのお客さんが訪れる。各研究会や生徒会の展示、各クラスで演示の発表などがある。クラス団体の演示は、内容は自由、それに加えて参加するかしないかも自由である。

6月、私達のクラスで、クラスとして演示団体に参加するか否かの話し合いがもたれた。多く的人是、参加に賛成だった。僕もそのうちの一人だった。「3年生の僕らにとって最後の学芸発表会だから。」「みんなで一つの目標に向かって頑張ることはいいことだ。」それが賛成派の人達の意見であった。

その一方で、数名の人達が参加に反対していた。「みんな忙しいのに面倒くさい。」「最初だけみんなやる気あって、後で誰かに責任を押しつけ合うような中途半端な状況になるくらいだったら、やらない方がまだ。」そのようなことが、参加に反対する人達の意見であった。

この時賛成派の人達の間では「どうして協力的じゃないのか。」と反対派の人達へ対する不満が募り、話し合いで、賛成派反対派の意見が激しくぶつかった。放課後約2時間にも及ぶ討論となった。

結論からいうと、この話し合いの結果、クラスとして演示に参加することに決まった。でもその時の雰囲気は、いつもないクラスの団結力が漂っていた。「ここまで色々話し合ったんだから、頑張らなくちゃな。」「反対派の人達にも納得してもらえるように、最後まで頑張ろう」そう多く的人是は心の中で思っていた。

3ヶ月後、学芸発表会本番。みんなで準備を進めてきた発表。あるテレビ番組になぞられて作った演示。なんと、あの時反対していた人達が、映像を編集するのを協力してくれていたたり、ステージ上で歌っていたり、発表の場を大きく盛り上げてくれていたのだ。もちろん賛成派だった人も。発表自体は、大大成功とまではいかなかったかもしれないけど、クラスで協力していいものをつくることができた。

話はとぶが、「論語」の中に、次のような言葉がある。

「子曰。君子和而不同。小人同而不和。」

この言葉から、何にでも賛成することが、調和を生むわけではない、ということが伝わってくる。もし小人のように、あの時僕ら全員が賛成派だったら、どうなっていたらろうか。調和は生まれず、妥協の産物となっていたのではないだろうか。

参加に何でもかんでも賛成しない、という人達が与えてくれた視点のおかげで、私達のクラスは参加する意義を、ふと立ち止まって考えることができたのだと思う。何にでも賛成しないことで、よりよいものが生み出され、結局それが調和へつながっていく、ということ身を以て感じた。

自分の意見をきっちりもって、それが周りとは対立するような事でも、実はそれは大切なこ

となんだなあ、と強く感じた経験だった。これからの活動にもきっと生きてくと思う。

《資料d》 選択した論語＝⑤（物語型・学校） 題＝テストで感じた論語の教え

この間、後期中間テストが学校で行われました。そのテストのために2週間ほど前から僕は、テスト対策の勉強を始めました。自分は特に数学が苦手なので何度も復習し、テスト本番までしっかりと努力を重ねました。

しかし、結果はあまり良くなく、自分としても非常に残念でしたし、悔しくも思いました。僕は、「なぜ、こんな結果になってしまったのか」と考えました。練習が足りなかったのではないかと、とも考えましたが気づきました。

「自分はただ単純に問題を解いていただけで、間違えてもそれを気にせずに勉強を進めていた。それが悪くて、こんな結果になってしまったのではないかと」。

これは『論語』に書いてある考えにつながると思います。

「子曰はく、『過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ。』と」

この文章の意味は、「過ちをしたことに気づいても改めない、これを本当の過ちというのだ」ということです。

その通りだと思います。やっぱり人間は完全ではないので絶対に過ち・まちがいがいがないなんてことはありえません。しかしその過ちに気づいて改善しようとするところが人間であり本当の姿なのではないかと思えます。過ちに気づいても、見ないふり、見えないふりをして現実から逃げてそれは何にもつながらないと思えます。だから本当の過ちというのはそういうことだと思います。

これからは自分の過ちに気づいたりすることがあったらしっかり、立ち止まり自分の胸で受けとめて改めるようにしていきたいと思えます。

《資料e》 選択した論語＝⑤（物語型・学校外） 題＝あたたかいポトフ

私は、母とケンカした。

私は、母と仲が良い。しかし、その分ケンカする時はかなりお互い頑固になり、白熱したものになってしまう。

土曜日の夜、私は母の趣味を少し茶化してしまった。私は、アイドルなど興味がない。そこでつい、口にしてしまった。しかし、それが母にはかなりひびいたらしい。「なぜ親を馬鹿にするのだ」と。

私は、反発した。「馬鹿になんかしていない」と。そして、ますますエスカレートしてしまい、私はますますいら立った。そこでとうとう口に出してしまう。「もうケンカなんか面倒くさい」と。

これは言うてはいけないことを言うてしまった、と後悔した。しかし、それはもう遅かった。母は、「私もあんたの洗濯干すのも、食事作るのも、何もかも面倒くさい」と私に言っ

た。私はますますいらいらした。そこから、私は、自分の母親に対してとても偉そうな態度で反抗した。

そして、母とケンカしてから翌日。「あんた、中学入って変わったね。前は、今より謙虚でケンカしても親に対して口ごたえなんてしなかったわね」と母は言った。私はこの言葉に打たれた。なぜなら、そのことは私が一番よくわかっているからだ。自分の心の中に、親に対してこんな偉そうな態度をとってはいけないと思っている自分がある。しかし、もう一人の自分がある。それは、親につき頑固になり偉そうになってしまう自分。この二つの気持ちが、中学生の私の心の中で対立している。

そんな対立している今、論語の中の一つであるこの言葉と出会う。「過ちをしたことに気づいても改めない、これを本当の過ちというのだ」これこそ、今の私が犯している過ちだと思う。

私は母に大変感謝している。お腹をすかせたらすぐお菓子を作ってくれ、私がテスト前になると夜食に好物のポトフを作ってくれる。私はそんな母が大好きだ。だから、こんな素直になれない自分を恥ずかしく思った。気づいている過ちを繰り返しても、何も良いことはないと思う。

そんなことを学校帰りの道で考えていたら、気づいたら家の前まで来ていた。私は、勇気を出して、「とても反省しています。ごめんなさい」と言った。母は、何も言わず私を家に入れた。数分後、父の声が聞こえた。「ご飯さめちゃうよ」。私は、リビングに向かい席についた。そして、ふとおかずを見る。好物のポトフであった。

そのポトフはいつも以上にあたたかく、おいしかった。

過ちを犯したら、素直に認める。それが互いを一番あたたかくしてくれる方法だと思う。

#### 《資料 f》 選択した論語＝③（評論型・見聞あり） 題＝「やさしさ」はどこにあるのか

今年の三月十一日、東北地方は地震によって壊滅的な被害を受けた。それから九ヶ月が経とうとしている。被害を受けた地域では、着々と震災復興が進められ、そこには日本全国だけでなく、外国からもたくさんの救いの手がさしのべられてきた。

このような、「復興支援」のやさしさは、相手のためになることをする、という「与える」やさしさだ。私たちが普段、「やさしさ」というとき、これを指すのではないか。しかし、論語には「与えない」やさしさについて書かれてある。子貢が「一言にして以て身を終ふるまで之を行ふべきものありや」と孔子に問うたところ、孔子はそれを思いやりであるとし、思いやりのことを「己所不欲、勿施於人」と答えている。これは、自分がしてほしくないと思うことを他人に対してしない、というやさしさだ。何かを「しない」やさしさというのはあまりピンとこないかもしれない。しかし、本当の「震災復興」にはこのやさしさも不可欠なのである。

ニュースの特集で復興支援のために東北産の野菜を使った料理を出す店が紹介された。東

北産の野菜を料理に使っているだけで特集が組まれるということ、それは裏を返せばそれほど私たちが「東北産」に敏感であるということだ。

「風評被害」ということばが、この一年でとても有名になった。商品に含まれる放射線の値の情報は、正しいものもあったのだろうが、中には根も葉もないうわさもあったに違いない。そして伝えられたうわさを鵜呑みにしてしまったり、他の人に伝えてしまった人があるのではないか。不安なときは、そういうことをしてしまいがちになるものだ。孔子が言うような、「与えない」やさしさはなかなかできない。特に、この情報化社会において、人は「情報」に簡単に左右される。だいたい、いちいちその情報の信憑性について考えていたら、社会のスピードについていけない。しかし、本当に被災地の人々のことを考えるならば、私達は一度、踏みとどまらなければならない。

《資料g》選択した論語＝⑤（評論型・見聞なし） 題＝失敗は成功のもと

論語の一節に「過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ」とある。これは「過ちをしたことに気づいても改めない、これを本当の過ちというのだ」という意味だ。過ちを改善しない、これはつまり同じ過ちを繰り返すということになるだろう。もちろんそれは過ちである。しかし、それだけではないだろう。過ちを改善するという行為には少なからず自分がしてしまったその過ちに対する反省があるはずだ。ところがその過ちを改善しないとすれば過去の過ちに反省していないのと同じことであろう。

もし自分の過ちに反省していなかったらどうなるだろうか。まず謝る際にも気持ちが込められなくなるだろう。そうすれば他人は自分に反省している心がないと思い、自分への信用はなくなるだろう。さらにそれが一人でなく何人もからの信用が無くなったとき、自分は孤立してしまうであろう。そうなってしまえば、もし自分が本当に反省して今までの過ちを改善したとしても、相手からの信用を失ってしまっただけでは誰にも相手にされなくなってしまふ。

つまり、孔子は自分の過ちを改善しないことで、自分を自ら孤立させてしまうことを「本当の過ち」だと言いたいのではないか。集団生活をしている人間の中で孤立してしまえば、人間は生きられなくなってしまう。その「本当の過ち」をしてしまわないために、自分の失敗を改善して次へとつなげなければいけないのだと思う。だからこそ「失敗は成功のもと」という言葉が生まれたのだ。直接成功に結びつかなくても、反省点の一つずつ改善していけば、成功というものがあるのではないだろうか。